

洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友會

思い出

大正九年卒 堀岡 正家

洛友会々報への寄稿をと唯漫然と筆をとって見ても、五十年の社会生活を平々凡々と過して来た凡人には目ぼしい種も見当らない。筆の進むままに何処へ脱線するか自分にも判らない。先づクラスの消息を知らせたい。大正九年の卒業生は入学の年が不況であって、僅かに十五名、今生き残りは五名である。前後の卒業生も少いので、二七会と云う名で大正八、九、十の三クラスの合同クラス会(年次の合計が二七になる)を毎月二七日に開いて来たが、近頃は集る常連僅か三名となつて、クラス会の態をなさない。卒業の時は其代りに割合に良い待遇で就職出来た。官庁の月給は当時は民間より良く、通信省電気試験所第三部(電力関係)へ入所した時の初任給は一〇八円であった。前年の大正八年に第一部(計測、標準関係)へ就職の故神保成吉君は確か一二〇

円であった。御手伝さんを二人おき相当な家に住んだ。之より少し前の先輩は人力車で出勤したと云う。其後大卒の相場が七十円位迄下つたと思う。役所勤めの間が大変恵まれておつた時代で、今日とは隔生の感がある。勅任官(今日の各省局長以上)は代議士諸公より宮中席次も上であつたから、今のように議員諸公に気をつかう必要もなかつた。正月には勅任官は恒例の陛下への拝謁があり、大礼服の借出になかなか苦勞し、一着を皆で代り合つて着用した。さて大正九年に電気試験所へ入所して意外であつたのは鉛筆もペン先も、独乙ババリアの品であつた。国産の鉛筆は削れども、芯も一緒に折れて了う。このようなことから職掌柄電気機器の国産化に向つて電気試験所のばく進が始まる。数多くの電気機器メーカーが協力せられ、われわれ若い研究

者が最も張切つた時代である。横河電機の電磁オッシュロが形だけは整つても使いものにはならない。二カ年位の間明かすの容器をオッシュログラフと云つていた。斯様な時代であるし、民間の研究も今日と違つて見るに足るものもなく、何をやつても大低国の研究の尖端を行く時代であつた。京大電気からも卒業研究に小生の研究室に幾人かが来られ、共に実験服を着て楽しく仕事をし、之等の人々の中には故加藤博見関西電力副社長、内田東北工業大学々長、大森日新電機副社長等がおられる。電気試験所第三部は電力及び電気応用の研究を担当しており、京大電気卒先輩に故笠井完さん(大正七年)がおられた。笠井さんは先づ陰極線オッシュログラフを手がけられ、後に之が電子顕微鏡へと発展し(之には Archiv für Elektrochemie の Dr. Busch の論文が役に立つた)、第三部長から建設時代の日立中央研究所に転出せられ、其の結果が日立製作所の電子顕微鏡の今日ある基となつてゐる。不幸にして入浴中の脳出血で急逝せられた。又同氏は雷害防止や通信線への誘導障害防止の研究で世界的な立派な業績を挙げられた。因に日本學術振興会の電子顕微鏡特別委員会は当時の振興会々長故長岡半太郎先生の意に沿ひ、笠井さ

んが陰の力して骨を折られて来たもので、万事に控え目のこの尊敬すべき先輩は其貢献をひたすら隠しておられ、ごく少数の人達だけが知つていた。P・R・過剰の当世には全く奥ゆかしい限りである。神保成吉君は第一部長として積算電力計の検定網を全国的に整備された功績者で、珍しい事務的手腕の勝れた人であつた。戦時中日大工学部の前身高等工業学校の創設を小生の懇請によつて、中心となつて衝に当られたが、不幸にして日大常務理事在任中先年胃癌で他界せられた。大正十年卒の故沼倉三郎君は神保君の後をうけて、第一部長兼企画課長として、当時所長の小生を助けて下され、其企画力には定評があつた。退官して日新電機の専務として、戦中活躍せられ、戦後理科大学の教頭として、得意の企画力を大いに發揮せられていたが、胃癌の為に有為な前途に終を告げられた。沼倉君の後任には大正十二年卒の関三郎が当られた。同君は現在京浜電測器(株)の会長として御活躍中である。電気試験所は有為な研究者を育成する目的で、定員に関係なく研究予算の範囲内で、研究員と云う名で多くの人材が入所せられていた。岐阜で悠々自適されている大正七年卒の各務米次郎先輩も其のお一人であつたと記憶している

さて小生に与えられた最初の研究は電力遮断器であつた。全く曖昧模糊な電弧現象を相手とするので、其の実験には止むを得ず受電変電所での人為的に短絡をつくる冒険をやり、主として電磁オッシュロで電弧の様子を記録した。稀に実験の手際が悪くて、銀座界隈を停電させた。銀座四丁目のパン屋の電気ガマが停電の為其中のパンがおしやかになつた(当時大正の末、此実験は木挽町分室が実験場所、電力会社の木挽町変電所から給電されておつた)。やる仕事が多様で、先輩から白熱電球の強制寿命試験も引継ぎ、其の終末でまとまつた実験式が一〇%の電圧上昇毎に寿命が短くなる関係を与えた。此関係は今でも使用されている。配電と其の消費関係が軽視されておつた時代なので、電線、ケーブル類、電蝕防止電気探鉱、配電線の昇圧、電熱線の改良、其の応用等の仕事を与えられ、間口許りが拡がった時代である。一事に執着し其の途で大をなすことが出来なかつたので、其の反省から若い方々には一事に専念して、大をなすように、いつもおすすめるのである。電気探鉱の仕事は終戦後官を退いてから、地熱発電(宮城県鳴子付近)や地回り防止(長野県茶臼山等)に引き出されることになる。新しい鉱

山の開発にはボスの繩張りがあった、時になぐり込みをかけたれた

昭和十六年から約三年間電気試験所員として風雲急な時代に出会って経験した事の幾つかを書き残しておきたい。其の一つは就任第一日に軍に召集されている所員を

夫々の専門技術を活用する為に第一線から呼戻すことである。この為に生命を余うし、今重要な職にある人々も幾人かおられる。次に

電力遮断器の改良研究をやった経験から友民一体の世界一大容量の電力遮断設備をつくる事を計画したが、之はなかなかまとまらな

い。現在神奈川県武山に超高压研究所としてこの構想のものが実現していることは喜ばしいことである。更に官民電気関係の研究機関を一カ所に集めて、電気研究都市をつくと云う考えの下に神奈川県

県相武台に広い山林を買収した。之は小生が内閣に創設された技術院に転出し、又戦況日々之急を告げて、結局終戦迄日の目を見な

ったが、現在の筑波学園都市のミニ版であった。

戦後今日に到る迄の若干の研究生活や役人暮らしを離れ、世智辛い実社会に触れて幼稚なことの数々を経験した。先づ企業目録書をつ

くることが上手になった。今では何んな基礎研究でも、一度道中は適当に想定して、企業化結果返つて見ることが、研究の効率化に役立つことと思っている。之は研究者自身に出来るようにするに

超したことはない。次に技術に携るものに哲学が欲しいと思う。幸いにして京都には教を乞う名智高僧に事かかない。招いて高話を聴

き、又参して座禅もよく、この恵まれた学園環境を活かし、母校出身の方々が豊かな人生哲学を持ち、技術をこの上に築いていって

もらいたいものと思う。追想に限りなく、余りにも雑ばくに陥るおそれも強いので、この辺りで一応筆をおいて退散することにしたい。

「明日の交通」

京都教育大学教授 宮 本 政 幸
昭和8年 卒

本年五月より六月にかけて、関西鉄道協会の御厚意によって、同協会企画の新交通システム視察団に参加することができて、世界の

新しい交通システムを、ワシントンのダレス国際空港にて開催されたトランスポ・七十二(Transpot72)を中心として視察した。同時に欧

州では英国環境省、パリのECMT (European Conference of Ministry of Transport) スイスのバツテル研究所ほか六カ国の十一都市を歴訪した。新交通システムを各地に求めて、見たり、聞いたり、乗ったりだったが、やはり「百聞は一見にしかず」であった。

いまやPRT (Personal Rapid Transit System) という言葉は聞きなれたが、ピープル・ムーバ

(People Mover) という語句は耳新しい。私たちが見てまわったものは、むしろPRTよりピープル

・ムーバだと考えている。トランスポ・七十二はいわば交通万国博、呼びものはむしろ航空機アクロバ

ット・ショーであった。開催期間は五月二十七日より九日間、この会場に政府より研究開発助成金をも

らった四種の新交通システムが展示され、試乗をまっていた。空気

浮上方式のトランス・テックス、ゴムタイヤを使用してガイドウェイ内にて動くACT (Automatic

ally Controlled Transportation) 同方式のダッシュキャベヤ、小型モノ

レールでモノキャブと呼ばれる四方式である。政府の助成金は展示試運転を含めた全費用の三分の二だが、その

総額は六百万ドルであって、未来交通にかけた政府の熱意がわかる。その他にも各種の展示があり、

欧州各国の政府や企業の意欲的なPRは、四種のペバリオンに業績を競っていたが、自動車業界からただ二社のみの出品というわが国の方針はやや不可解であった。

トランスポ・七十二を中心として、その他アメリカ各地の新交通システムに対しては「科学朝日」

の本年八月号にかなり詳しく紹介されている。この中に東大の石井先生(わが国のCVS計画担当)

の意見も紹介されているが、これらの展示品のPRTは、トランスポ・七十二の解説書にみられるようにピープル・ムーバと呼ぶのが適

当である。私たちはダラス(テキサス州)にてジェット・レール(モノレール方式)、エヤートラン(ゴムタイヤ及びガイドウェイ方式)、さらにタンパ(フロリダ州)にて

スカイバス(ゴムタイヤ及びガイドウェイ方式)をみて、ジェットレール、スカイバスは空港のサービス用として乗客が広く利用しつつあった。

モノキャブ及びトランス・テックスの定員はそれぞれ六人、十人だが、それ以外の方式は二四〇四〇人という大型だから、これらが自家用車に変わる明日の乗物PRTとは言いにくい。むしろ水平型昇降装置と呼ぶことが正しい表現のように考えられた。

つまり自動車をはき物として扱

大してきたアメリカの経済と社会、かつてアメリカの自動車は日本人の下駄だと聞かされたことがあった。いまなら靴であろう。アメリカ人に自動車があれば、仕事ができない。そして自動車を利用することが前提として都市も田園も発展したわけだから、自動車無視の交通システムは存在しなかった。また国土の広さは東西の時差が四時間あって、航空機を利用すれば一時間をまたず他国の領空という欧州とは基本的に考え方の異なるのは当然であろう。航空機の大規模化と速度向上は能率増進であり、合理化の最上たるものである。国土は広く空港に適した用地が自由に入手できるのだから、今回訪れたダラス・フォートワース空港の建設現場はまさにその見本であった。

明年度第一工完了と同時に開業するわけだが、全面積の広さは東西十三キロ、南北十三キロ半、この中央部に乗客サービス施設が配置される。乗客の乗換、荷物の積換、自動車置場との交通など、場合によって数キロを移動する必要がある。この対策がゴムタイヤ及びガイドウェイ方式のエヤートランの採用で解決しようとするもので、種々の空港内交通を十分以内の所要時間におさめる計画である。

したがってPRTという言葉はど
うにも適当ではなく、この車の電
動機出力七五馬力、定員四十人
は当然小型路面電車である。

世界的にみて、さすがに新交通
システムでは、まず内燃機関利用
のピープル・ムーバは見かけない
。したがって電車と呼ばれるわけ
だが、その例は大都市モルガン
・タウンの建設工事中のスターカ
ーである。延長約五キロ、他のピ
ーブル・ムーバと同じ構想であ
る。このウエスト・バージニア大

学は、そのキャンパスが大学本部
理工学部、医学部と三分され、こ
の相互交通を便利にして、かつ自
動車を排除しようとした新しいシ
ステムであって、見方をかえれば
やはり新路面電車ともいえるわけ
だ。いま私たちの前に展示された
ものの多くは、かなり多量の乗客
を運びうるピーブル・ムーバであ
って、PRTは皆無に等しい。

ニューヨーク交通管団では、一
般に国民の自動車への愛着がある
から、そうは簡単に新交通システ
ムには移るとも思えない。したが
って交通混雑の緩和策として地下
鉄網の整備が必要だと語っていた
が、この言葉は非常に印象的であ
った。自動車の戸口より戸口への
自由度、乗心地の良さ、さらにプ
ライバシーの問題、この特徴に対
してさらにこれを上廻る特徴をも

ったPRTでなければ、道路混雑
のみの代替システムでは利用者の
共感を期待できるだろうか。アメ
リカ運輸省の考えの中に、まず既
存のシステムを改善し、身障者や
自家用車のない人々へのサービス
として、公共交通機関の充実を必
要としていることは、新交通シス
テム検討の第一歩として重要な点
である。

イギリスでは有志が集って個人
的に訪れたステーブネッジ(Steynage)と呼ぶロンドン北方五〇
キロにある新都市計画第一号の現
実をみたことは非常に興味深かつ
た。この都市の人口は約六万五千
職住を一体化し、航空機研究所、
印刷工場などの工場とショップ
・センター、住宅など整理保存
された美しい環境のもとに整然た
る町作りが行なわれ、車をしめだ
した商店街、立体交差の自動車道
乳母車用の小レイン、このレイン
も立体交差しているが、わが国の
歩道橋と異なり階段は存在しな
い。域内交通はバスで、ロンドン
との間に複床式バスが運転、鉄道
もこの都市の西周を走っていた
が、非電化区間だった。日常ロン
ドンへ通勤する必要がないのだけ
ら当然の現象といえる。

パリの交通はいわばフランスの
新交通システムの代表例といえる
だろう。ECMTとパリ交通管団

の考え方を総合すると次のように
なる。これは筆者が私見を加え
たものであるが、在来のパリの地
下鉄網は世界的にみてもその網目
は細かく(平均五〇〇米強の駅間)
かつ延長キロは二〇〇キロをこえ
る。私たちは「路面電車網を地下
に移設した」から、一九三八年の
早期に路面電車廃止にふみきつた
とみている。しかし、西欧文化の
中心地は歴史的建造物も多く、古
い街は狭い道幅も多く再開発も困
難である。

一九六九年の西地区より開通し
た十七キロの新地下鉄線を第一歩
として、一九七一年の副都心デフ
アンスとエトアール間約四キロ
(中間駅なし)からさらにオペラ
へと延び、いまやセヌ間北岸の
都心に工事を進めているこのトン
ネルは全く大型である。三両編成
一編成長さ七二・九メートル、最
大三編成九両、最高速度一〇〇キ
ロ、実用速度五〇キロで運転をす
る。オペラ駅は地下三六メートル
、長さ二二五メートル、幅四〇
メートル、高さ二〇メートルとい
う規模は、その積極的意図がうか
がわれる。

南北貫通線の計画もあり、さら
に遠方住宅地とこの幹線との連絡
用交通機関には政府も研究に力を
かしているエーロトレイン、地上
浮上高速電車を用いる。在来地下

鉄線の網目のよらい地区はその補
完用にミニチューブを利用すると
いう。

パツテル研究所では交通問題に
関するシステムズ・アナリシスの
話を聞いたが、この実験所がダン
ロップ・タイヤ会社の資金で研
究を重ねてきたスピードウェイ
(Speedway)と称する動く歩道は
その機構としては興味深いもので
あった。歩道面の彎曲と高速化を
実現して、在来の欠点を除くこと
に成功したものと見えるが、実験

設備が屋内に納められていたため
か、運転中の騒音が極めて甚しい
ものだった。機構的にも音響発生
はやむを得ないと思つて乗つてみ
たが、最近のニュースではロンド
ンで試用されて好評を得ていると
のことである。

ミュンヘンではオリピック開
催前の準備ムードの中を新しい地
下鉄をみてまわったが、私たちの
訪問目的にはクラウス社(Krauss
Maffei)とメッサシューミット社
(BMMと略称)(Messerschmidt-
Bolohn-Blkow)の新交通システ
ムを視察することにあった。前者
は磁気浮上式を推賞し、その試運
転線で高速運転の実験をみせてく
れた。PRTとしては地下鉄用に
すすめたいといっていたが、リニ
アモータを利用すれば、当然トン
ネル断面積は縮少できるわけであ

る。

後者は映画のみで、磁気浮上式
を見せてくれたが、会社の雰囲気
は極めて日本人に警戒的のよう
にみうけた。またわが国において開
発中のCVSには強い関心を示
し、さらに提携する日本の商社は
なからうかとの意見もあった。し
たがって欧州ではPRTについて
の開発は、OECの資料からは
かなりの数が見られるのだが、ア
メリカほどの華かさはみられな
い。

これはアメリカと都市開発の歴
史と機構が異なり、ドイツ、スイ
スなど西欧の各都市は一〇〇万未
満の人口のものが多く、かつ周辺
は緑の田園に連り道路幅も大き
い。在来の交通システムで十分に
その機能を發揮しているのでは
あり、道路の狭い旧城壁内に強いて
諸車を入れなくてもよい体系がみ
られる。歩行者天国となっている
ショップ・センターが各地に
みられたことは、既存のシステム
の改善こそまず合理化の第一歩で
あろう。

旅程の最後のストックホルムの
視察後、私たちのうち三人(一人
は京阪の同窓中山君だ)は、ス
トックホルムから一時間の大学ケ
ウブサラを訪問、国鉄バスでエン
ケーピングをへてストックホルム
に戻ったが、この鉄道の旅と町々

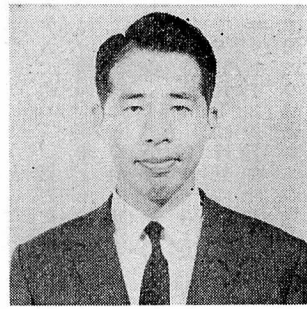
の静かで清らかな環境は、ほんとうの人間生活が、ほんとうの交通

機関がどうあるべきかを教えているように思えた。(九・一五)

アメリカにおける

情報処理研究

京都大学助教授
昭和三十四年卒
長尾 真



今年の五月中旬から一カ月半ほどカナダとアメリカをまわって来ました。今度はこちらとした国際会議に出席すること、カナダ、アメリカにおける情報処理研究、特にパターン認識、言語処理、グラフィックス、計算機ネットワークなどの研究機関を訪問することが目的でした。そこでこれらのことについてごく簡単に紹介してみたいと思います。

パターン認識では、文字の自動認識の研究よりは図形処理、図形認識の研究の方に重点が移ってきています(日本では手書き文字、漢字の認識がのこっていますが事

情は同様です)。即ち写真データを電子計算機に入れ種々の処理をするわけです。たとえば胸部X線写真を高域フィルターに通せば、ぼんやりとしていた病巣がはっきりと見えるとか(実際にはそれほど簡単ではありませんが)、染色体写真を解析して異常染色体を見つけたら、染色体の数をかぞえたりするとか、プレパレート上に癌細胞を発見したりするなどの研究が非常に盛んです。この外に月や火星から送られてくる写真データから雑音をのぞき歪を修正し、画質を改善したり、気象衛星からの雲の写真を解析したり、指紋の自動解析と照合など、いろいろな分野で写真の解析・認識が行なわれています。もっともこれらのいくつかについては日本でも良い研究がありますし、特に我々もがんばっております(一)が、彼等のもっている装置の良さと、スタッフの層の厚さなど平均的にみればやはりアメリカは何歩か先んじてい

ると言えるでしょう。

特に二次元のフーリエ変換(二次元周波数)とフィルターに関する理論と実際は、彼等の方がかなり進んでいます。図形の認識の方面では日本もまずまずというところでしょうか。

この分野の研究の応用としておもしろいことを聞きました。犯人が車で逃げるのをうしろからとった写真が唯一の手がかりという事件があったそうです。残念ながら写真は相手の車が高速で走っていたために「ブレ」がこつていて車の番号が読めなかった。ところがこれは図形処理の技術を使えばある程度まで解決できます。即ち車の速度をいろいろに仮定してみますと「ブレ」をとりのぞいてきれいな画像が回復できるわけです。この技術を使っていろいろとやってみた結果、数字が一字だけ解読できた。車があまりに小さくしか撮れていなかったために、これ以上はむりだったのです。犯人がつかまったかどうかは知りません。

カリフォルニア工科大学に付属しているジェット推進研究所は、たまにテレビや新聞に出ますので皆さんもご存知かも知れませんが、火星のまわりをまわっているサーベイヤーのコントロール・セクターがあり、サーベイヤーから

送られてくる写真データの解析を行なっている部門もあります。火星の表面の写真電子計算機を用いてもうすでに七、〇〇〇枚以上解析しました。主たる仕事は送られてくる写真の雑音をのぞき、画質を改善し、座標変換を行なっており、火星の表面を真上から見おろした写真を作りなおし、研究者に提供することです。たまたみ一疊ほどの大きさの火星の火口の写真や、不思議な溝の写真、一万メートル以上の深さがあるという深い谷の写真など、どちらをむいてもすばらしい写真ばかりの部屋を見ました。それからサーベイヤーの予備機(使わなかったもの)が展示してあるのも見ましたが、すべてなかなかファンタスティックです。画質改善の効果は非常によく送られて来た生の写真からはほとんど何も判断できないものが画質改善後は山や山の陰、溝などがくつきりと見えます。皆さんがお持ちになつているピンぼけの写真でも、それが金にはかえられないほど貴重なもので、お金をだすつもりなら、ピンぼけをなおしたずばらしい写真を手に入れることができるでしょう。こういっことは技術的には日本でも可能ですが、まだこれだけのシステムは日本にはありません。

最近日本でも産業用ロボット

がある程度普及しているようですが、本格的なロボット研究はマサチューセッツ工科大学やスタンフォード大学、スタンフォード研究所などで行なわれています。ロボットといってももちろん漫画に出てくるようなものでなく、たとえば無人の車を月や火星、金星などに送ろうというわけです。この車はそれ自身計算機をもつていて、自分で外界をながめ適切な判断を下し、行動をすることのできるものでなければなりません。かならずしも人間に似ている必要はないわけです。このようなロボットでの重要な問題は視覚情報の処理です。ビデオン・カメラなどの外界を見る装置から入力された画像情報を処理し、どんな物が周囲にあるか、自分がどこにいるか、目的の所へ行くためにはどこをどのように通って行ったらよいかなどを判断できなければなりません。現在はいかなり基礎的な研究を行なっている段階ですが、なかなかおもしろいものを作っています。

このような人間的な判断は情報処理のあらゆる分野で必要とされるものです。言語情報処理も人間的な判断を必要とする代表的な分野で、たとえば英語からフランス語へ自動翻訳するとか、いろんな質問を計算機にすると適切な答えを計算機が返してくるシステムを

作るといった研究が行なわれてい
ます。この場合の問題は文章を正
しく解釈することですが、電子計
算機にとって「文章を理解する
はいかなることか」が明らかにさ
れねばなりません。最近になって
こういったことに関するかなりお
もしろいモデルが作られるよう
なってきました。これからの発展
が楽しみです。日本語は英語やフ
ランス語とはちがった構造をして
いますので、我々は日本語に適し
たモデルを開発中です。

電気・電子工学が情報工学の発
達の基礎になっていることは言う
までもありませんが、計算機科学
・情報科学が電気・電子工学の今
後の発展にどれほど重要なもの
であるかはアメリカでいろいろと
われています。日本でももっと積
極的にその意義を認める時代のく
ることが望まれます。電子計算機
の技術全般についてはおそらく
十年の差があるのではないでしょ
うか。

今度の旅行ではあちこちでなつ
かしい方々に会いました。二、三
年前フランスに一年いた時にお世
話になったグルノーブル大学の先
生がモントリオールにいて、久し
ぶりにフランス語会話を楽しませ
ました。その外にも以前から親しい
アメリカの人達には家庭にまねか
れたりして楽しく過しました。

京都出身の方々にもたくさんお
会いし、皆さんが世界的に活躍し
ておられること、世界がせまくな
ったことに今さらながら感心しま
した。トロント大学の教授をして
おられる飯塚啓吾氏、同じくトロ
ント大学に行っておられる教室の
小倉先生、マサチューセツ工科大
学へ行っておられる池田先生など
皆さん元気に活躍しておられまし
た。日電の鎌山圭一郎さんとはポ
ストンで電話で親しく話をしまし
た。私と同期では東芝の岡村宗治
君がポストンに、電波研の畚野信
義君がワシントンのNASAに行

昭 二 同 窓 会

開催地についての幹事案の内
一番賛成の多かったのは「京都」
であり、よって四十五周年同窓会
を左記のように行ないました。

(一) 時は五月二十一日(日)・二十
二(月)の両日。昭二会は何時も
何時も快晴で誠に有難き限りで
す。

(二) 物故先生と同期生の法事を
天龍寺にて。どうせするのなら一
流でということで同寺を選びまし
た。回向料も一流でした。

(三) 大堰川畔の料亭千鳥で夕食
会。鳥養先生(全く久々の御出席)
と松田先生の御来会を得て一同大
いに歓喜いたしました。とりあえ

つておられて会いましたし、ヒュ
ーストンに行っておられる教室の
鷹尾和昭君とは電話で何度か親し
く話をしました。それに日立の吹
抜敬彦君がたまたま一カ月ほどア
メリカへ来ていて、畚野君のこ
ろで会い「やあ来ているのか」と
言いあいました。一年下の東芝の
佐々木貞夫氏にも池田さんのとこ
ろでお会いしました。他にも今回
はお会いしなかつた洛友会の方々
も多く、世界的に活躍しておられ
ることはほんとうに心づよい気が
します。

ずもう五年頑張りました。そし
て五十周年を迎えましょうとお互
いに祈り合いました。その夜は京
都ホテルに宿泊。

四 第二日は「新平家物語」に
ちなんで下記の所をバスで回遊。
ガイド嬢がなかなかのベテランで
した。同行十九名中、六波羅密寺
(空世上人の立像……、念仏を称
える口から六体の弥陀が出入りし
ているのを表現したのがとても珍
しく)は殆どが始めて三千院、寂
光院、鞍馬寺は三分の一が始めて

というところで、実は「さもありな
ん」と思っていました幹事の考え
が当って「よかった」と自己満足

をしました。三寺院は今で
こそ電車、バスで直ぐ行ける間近
かな所ですが、大正の末期では一
日ばかりでテクテク出かけた場所
ですから、機会がなくて未だ知ら
ない人々がいた筈です。同窓会と
して五年振りです。大谷先生
外諸先生の御案内で電気諸教室、
新築早々の体育館を見学しまし
た。私共の古巣、あのなつかしい
赤煉瓦の教室は数年の内に姿を消
すとのお話で、一寸淋しさを感じ
ました。老人いや高齢者の我々に
はいささか盛り沢山でしたが、全
員フルコースを踏破し、まだまだ
大丈夫の感を受けました。という
ものはこれを書いてみます私
が今回は失敗だらけで、大は料亭
で五万円も払い過ぎたり、昼飯代
一万五千円の食い逃げと相成った

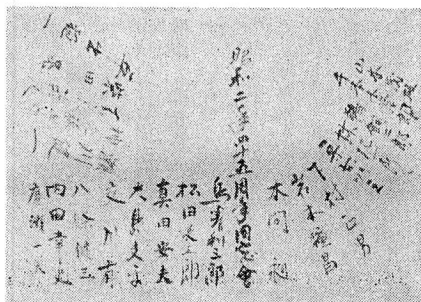
洛友会東北支部第七回総会報告

昭和四十七年七月一日

第七回東北支部総会は七月一日
(土)午後六時より仙台共済会館
において、本部より大谷先生をお
迎えして開催された。初夏の暑い
日であったが、弘前、福島など遠
隔地からの参加を得て、出席者数
十三名の盛会であった。

内山幹事の司会で、平井支部長
の挨拶、大谷先生より本部の近状
報告の後、四十六年度会計報告、

り、小は荷物を忘れたり等々数々
あるのですが、何れも運良く実害
なしで助かりました。時間不足を
気にしてあわてたことがいけな
かったと思うのですが、お年のせい
でほけて来たのだよといわれても
止むを得ません。(瀬川記)



役員改選、会則改正等を満場一致
で承認し、総会は滞りなく終了し
た。

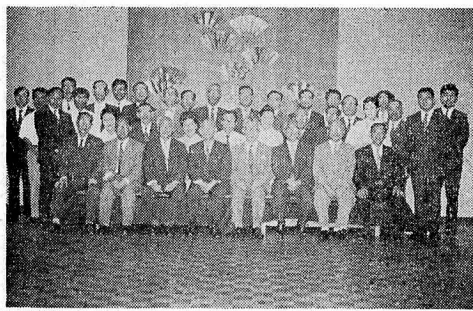
ついで、大谷先生より「二一世
紀にむかう電気エネルギーにつ
いて」の講話を聞きエネルギーにつ
いての多くの問題点と希望を新た
にした。

引き続き懇親会に入り、平井支
部長の電気学会会長就任を祝し、

乾杯し、大谷先生の公害に対する電気の役割等をお聞きしながら夜

のふけるのも忘れ名残を惜しみつつ散会した。

中国支部総会



会費四十六年度会計報告他、一連の議事を終了した。なお本年は役員改選期であり支部長の提案で会則の一部改訂、新役員の選任がおこなわれた。引き続き別室で懇親会に移り、一同は先生方をかこみ教室をなつかしみ、あるいは肩を組みエレクトーンの伴奏のもと、美(?)声を披露したりして楽しいひとときを過ぎた。

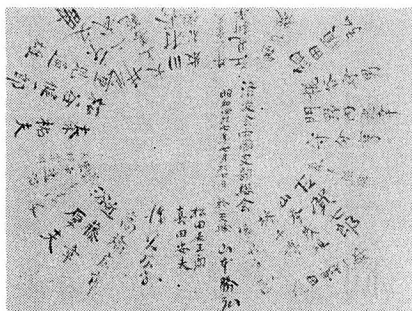
中国支部では七月十七日午後六時より広島市内の料亭「あまぎ」で四十七年度総会を開催した。

当日は本部より松田、林(千)両先生ならびに山本幹事においでいただいた二十九名が参集。真田支部長の開会の挨拶のあと、本部の両先生および山本幹事からの近況報告をおききし、梶谷幹事の司

東京支部の仏法講話会

いささか旧聞に属するが去る二月五日午後二時、いつもの学術講演と趣を変えて仏法を聴く会を持

った。会場は昭五平青木三郎氏にお願いして同社の和田会長のお世話で第一勧銀昭和通支店のセミ室



をお借りした。急であつた為支部全員には連絡とれず、集つたのは有志七十余名。白髪の方が多く御夫人同伴の方もあり、皆熱心に聴いた。講師は京都花園大学学長山田無文老師でお話はわかり易く一同深い感銘を受けた。

要旨は近時皆心の依り所を失つて了つた。赤坊も三十二ヵ月経つと忒、即ち自他がわかる。十六ヵ月経つた所では忒、即ち自我がわかる。忒の前は零である。この零がわかるのが仏法である。世界を救うものは内側を大切にする東洋の思想である。現代を救うものは人間性の発見である。要するに原点零に戻れとの趣旨であつた。

講話後質疑応答あり、又別室にてお茶を頂きつつ中共土産話を承つた。「我為人々、人々為我」「先公後志公私合作社」等のはり紙が目につき精神的にはなかなか立派であるとのことであつた。その他平素の疑念を老師に質したりして和かな一時であつた。

講話につけ想い出すは昭和三年の昔。入学して一番最初の講義で青柳先生より(十)の情操、(一)の情操等延々四時間にわたり宗教的心の話を承つた。当時を想起し稀には今回の如き話を聞くのも有意義ではなからうかと考える次第である。(昭六福岡正記)

関西支部家族旅行の予告

期日 十一月十二日(日)
コース 琵琶湖周遊 みどり丸 (二八〇屯 五〇〇人)
借切

集合 午前十時 浜大津琵琶湖汽船のりば
出航 午前十時三十分 近江舞子、竹生島上陸

船内講話、京大理学部臨湖実験所 堀江正治氏
"文化財としてのびわ湖の貴重さ"
その他

帰航 十七時三十分 浜大津解船
弁当、マジシャン、囲碁、将棋用意あり(会員各位に)

詳細は、近日中に御案内状を出しますので奮って御参加下さい。

訃音

大正十四年 相原賀十郎
大正六年 辻 忠夫
講大正十二年 西村 誠
明治四十五年 武信 利治

以上の方々のご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

電気総合雑誌 月刊 電気評論 毎月10日発売

10月号 屋内配電 10月10日発売

最も新しい屋内配電技術の実相ならびに今後のすう勢を網羅

株式会社 電気評論社

編集後記

。中秋の好時節を迎え、會員の皆様益々御健勝のことと存じます。

本号には、大先輩堀岡正家氏より御原稿を賜りました。堀岡さんは、東京支部の大先輩として洛友会のために、御尽力下さり何時も御世話になって居ります。此の機会に厚く御礼申し上げます。

関西支部では阪神電鉄の御世話で、此の秋家族旅行会を催し、琵琶湖周遊を行なうことになりましたので、その予告を御知らせします。多数、御参加を希望します。(幹事 山本記)